

平成 29 年度 研究成果報告書

Research Achievement Report FY2017

講座名・職名 Course Title・Job Title	ヨーロッパ・アメリカ I 講座・教授
氏名 Name	大津智彦
専門分野 Academic Field	英語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	英語統語法の歴史的発達
<p>昨年度の研究・大津（2016）から生まれた第一番目の問題、つまり、なぜ 1600 年代には離接詞 <i>likely</i> の単独使用が盛んに行われていたものが 1700 年代以降、急激に強意副詞との共起使用に変わったのかを解明すべく、現在、17 世紀、18 世紀のイギリス英語研究に使用しうる最大規模のデータベースである <i>OED Online</i> と <i>Eighteenth Century Collections Online</i> を検索して調査した。今年度は、コーパスのジャンルを日記や散文演劇など口語的な書き言葉に限定せず、文語を含む多様なジャンルについて綿密な調査を行なったが、大津（2016）とほぼ同じ調査結果が生じた。つまり、今回の調査ではテキストジャンルの観点から、17 世紀と 18 世紀の間に観察される急激な変化の機序に関する解明には至らなかった。ただ、統語的観点から変化を解明する糸口を見つけることはできた。ひとつは、強意副詞の修飾は <i>very</i> から始まった可能性が高い点である。もうひとつは、統語形式によっては強意副詞の修飾を受けにくく、文構造によって変化の速度に差があったと考えられる点である。なお、この結果を「研究ノート：近代初期英語における離接詞 <i>likely</i> について-強意副詞による修飾の有無の変遷-」として大阪大学『英米研究』第 42 号（大阪大学 英米学会、2018 年 3 月）で発表した。</p> <p>17 世紀と 18 世紀の離接詞 <i>likely</i> の用法の変化が興味深いのはその <i>abruptness</i> である。しかし、調査をするにあたっては、17 世紀と 18 世紀における離接詞 <i>likely</i> の頻度の低さを痛感させられた。この <i>abruptness</i> の謎を解くには、17 世紀と 18 世紀のイギリス英語コーパスにおける規模と使い勝手の両方におけるさらなる発展が必要である。</p>	